

# 大学の自治と大学コミュニティ——東大闘争の前と後

岡安 喜三郎（おかやす・きさぶろう）

一九六六年理科一類入学。

## 1 概括

「東大紛争」といえば一九六九年一月の「東大安田講堂攻防戦」、そして「入試中止」というのが多くの方々の印象であり、もはや歴史である。私が当時「東大紛争」に関わっていたと言ふと、「安田講堂に？」と聞かれることがある。中学・高校の同窓生などである。少なくとも私は当時の安田講堂には入っていない。逆にその闘争方針を批判していた立場である。

紛争が「もつれて争いになること」（『広辞苑』など）という意味では確かに東大も「紛争」ではあつたが、あまりにも解釈的・傍観者的であるので、当時者として何を変えようとしていたのかに焦点を合わせるため、以下「東大闘争」と呼ぶ。

東大闘争の経過そのものについては他で語られるのでここでは省略する。しかし、歴史的な見方をすれば、やはり大学の自治をめぐる闘いであつたことは論を俟たないであろう。そこでは対立する価値や利益をめぐつて論争も繰り広げられた。

発端となつた医学部学生処分は、医教授会に事実を見る力がなかつた、行政能力の基礎がなかつたという象徴的事象とも言えるし、そもそも大学全体の既存の体制＝独善的「大学の自治＝教授会の自治」運営そのものに齟齬があつたことの必然的結果であつた。

大学は一つのコミュニティである。構成員が自分たちのことを自分たちで処理する、自らが自らを治めることが自治である、といふこの当たり前のことを、利害関係の異なる集団のコミュニティで実現するのが、コミュニティの自治の当為性を基礎づける。コミュニティにあつて、その中の一つの構成集団（例えば教授会）が他の構成員を治めることは決して自治とは言わない。それこそが、教授と学生を一つの社団とする中世以来の大学自治の考え方の躊躇である。

私は卒業後、東大生協およびその後の全国大学生協連の役員として、学生・教職員（いわゆる固有の大学人）との付き合いが多かつた。特に大学生協連時代には、東大闘争時の加藤一郎総長代行を補佐した経験のある、福武直<sup>ただ</sup>東大名誉教授および大内力<sup>ひだり</sup>同名誉教授の会長理事のもとで長きに渡つて専務理事を務めた。これらの関係も含めて、東大闘争終結半世紀を経た時点で、大学の自治が大学コミュニティと密接に関係するという考えに至つた半生を振り返つてみたい。

## 2 駒場学生寮の寮生として〈闘うことは学ぶこと〉

東大闘争の期間を一九六八年から一九六九年とすれば、私は留年してまだ教養学部の学生であつた。一九六六年に理科I類に入学、当時の呼称は「四一入学」、昭和の元号が使われていたのを記憶している。

駒場時代は、間に東大闘争があつたとは言え、工学部進学の前に四年半も教養学部に在籍し駒場寮に住ん

でいた。今から思えば棲息していた感もあるが、人との付き合いではもつとも人間らしい生活を教えられたのかも知れない。

入学したその年の五月には第四九期駒場寮委員会の内務担当副委員長を引き受けてしまった（一期四ヵ月）。就任前の任務が寮委員の勧誘であった。浪人していたかも知れない一年生（当時は前年まで一浪が過半数）などを一八歳の若造が勧誘するのだから一見無謀である。引き続く第五〇期も副委員長（涉外担当）を引き受けた。ここでは教養学部厚生課長との交渉も多く、大人としての付き合い方を覚えたようだ。

駒場寮には確かに自治が存在していた。食堂経営を含む運営執行部、総代会制度の議決機関、寮生で構成した退寮処分の権限を持つ懲罰委員会の存在など。変わったところでは、退寮・引越しの際に寮費滞納のまでは区役所出張所が住民票の転出を受け付けてくれないので、滞納者は慌てて何万円もの支払いをする羽目になつた先輩元寮生を見ている。

副委員長になつての夏、全寮連（全日本学生寮自治会連合）の定期大会が明治大学で開かれた。大会は現執行部を追及する反主流派の諸氏が、壇上で報告する三役を小突いたりして発言を妨害する一方、出入り口は封鎖されたままという、異常な事態が数時間にわたつて続いた。結局は支援部隊による封鎖解除による救出を得て、大会は終了したが、その時初めてゲバ棒なるものを見た。

二年生になる前の一九六七年三月初めに、「善隣会館事件」なるものが起きた。日中共産党の不仲の下、日中友好協会が後楽園近くの善隣会館から強制退去されるのを阻止しに行つた際、協会入口ドア前で小競り合いがあり、不幸にも一学生が顔面眉のあたりに蹴りを喰らい傷を負つた。じつは私である。負傷した私は同会館の在日華僑学生寮の一室に連れて行かれたが、拉致・監禁ではなく、女子学生がひたすら謝つていた。私は紅衛兵運動の如く暴力を振るう体質を許せず批判していた。その後、厚生年金病院まで車で送られた。

その時の傷口手術跡が今でも残っている。

大学二年目の一九六七年六月から一九六九年六月の二年間（二期）ほど都寮連（東京都学生寮自治会連合）書記長を務めた。二期も務めるのは好き者と思われたが、委員長も書記長の私といつしょに二期続けたので、それほどの違和感はなかった。全寮連や都寮連の書記局は駒場寮だったが、同じキャンパスでの授業も、一年生の五月からほとんど出ていなかつた。

都寮連に加盟していた学生寮には戦前の自治寮時代の寮歌が残されているところもあつた。その中でもつとも印象が強かつたのが、旧東商大予科寮（一橋大学「<sup>いっぽう</sup>橋寮の前身」）の寮歌「紫紺の闇」である。「橋人うまず築きゆく 自由の砦自治の城」（一番より）とか「續ときし二寮よ 自由は死もて守るべし」（四番より）。何とも自由や自治を守るには堅い決意のいることか、感動である。

一九六七年当時、沖縄はアメリカ統治下で日本人の本土との自由往来が厳しく制限されていた。渡航には首相発行の身分証明書が必要だつた。この渡航制限に抗議し自由往来実現を要求する沖縄県民集会が六月一二日に企画され、これとの「連帯のため」として渡航申請闘争を取り組んだ。実際発行されたのは数人で、当時の民放労連教宣部長と渡沖した。瀬長亀次郎さんという方に初めて会つた。隣接した刑務所の監視塔が瀬長さんの家を向いているのが妙に印象に残つた。

一九六八年の八月には、ブルガリア・ソフィアでの世界平和友好祭に全寮連の代表として参加した。民青（日本民主青年同盟）と社青同（日本社会主義青年同盟）協会派を軸に青年学生組織で参加団を結成した。ソフィアで初めて南ベトナム解放民族戦線の戦士と交流した。帰国の際、入国審査待ちの新潟港沖で、ソ連軍のプラハ侵攻のニュースを聞くことになり、「これがソ連旅行中だつたら抗議行動でもして捕まつたかも知れない」と目を合わせたものである。

すでに当時、ソ連や中国、朝鮮などの現実の社会主義建設について見方は冷静だった。

寮運動の原点に戻ると、学生寮の存在意義は、大学教育の機会均等を保障する場、および生活の場での自治を実践し社会正義に基づく良き知識人となることを保障する場ということになる。個人は加えて半分返済無用の特別奨学金の受給がさらなる後押しをしてくれた。

寮運動の主要課題は、「負担区分反対」「〇管規反対」「希望者全員の入る新寮建設」などとともに「文化・レクリエーション活動」であつた。後の二者はともかく、前二者は隠語のように見えるが、これが寮運動、寮自治を守る運動の根幹でもあつた。

「負担区分」の押し付けは受益者負担の原則の名目で行われたが、それに反対する運動は教育の機会均等を守る立場からであつた。「〇管規」（「〇〇大学学生寮管理運営規程」）は、集会の自由などさまざまな自治の制限であつた。各大学は新寮要求にも「〇管規」承認を条件という頑なな対応であつた。これらに當造物理論とか特別権力関係論が使われるのだから、法学部でもない私なども勉強しなければならなかつた。実際に〈闘うこと〉とは学ぶこと〉そのものであつた。

こういう学寮政策は、大学政策・文教政策・厚生政策とともに、運動主体からは、『戦後反動期』の一環と認識され、われわれにも日本の未来に対する危機感が存在した。それが東大闘争以前の学生運動の推進力でもあつた。世界史的には東西冷戦の緊張下、アメリカのベトナム侵略に反対する運動、学生の社会正義の運動などで世界的な拡がりを見せていた。もちろん政党の思惑もあつたろうが、多くの学生、また寮生は自主品牌的判断で運動していたことは間違いない。

〈闘うこと〉とは学ぶこと〉という実践は、学生団体が共催で、「一二月全国学術文化集会」「三月集会」などの研究集会を通じて現実化していく。ここに、医学部不当処分問題が入ってきた。怒りが沸き起らぬい筈

がない。「権力の使い方や行政能力の未熟な集団が他人を統治するのは自治の蹂躪である!」と思うのも必然であった。

### 3 確認書、その後の「大学コミュニティの充実」

この項を立てた理由は、「東大確認書」によつて結構な恩恵を享受したのが、意外と東大生協ではないかと思うからである。学生・教職員のための福利厚生施設の充実、具体的には大学食堂、書籍店舗、勉学用品店舗、生活用品店舗などが、一九七〇年代に急速に充実したという実態がある。

事態を列挙すれば、駒場では一九七一年に食堂拡張、一九七二年には厚生会館建設で購買部と書籍部が大幅拡充。それまでの古い木造建物から、日本の大学でも有数の広さの店舗が成立した。書籍店舗については木造二〇・五坪から鉄筋の二階に一二四坪（バックスペース込み）が出来上がった。同じ頃、本郷においても文藝一号館の安田講堂寄りの一角にあつた二五坪ほどの書籍小店舗が、安田講堂地下（裏側一階）の七五坪ほどの店舗として開店した（一九七〇年五月）。書籍と同時に、プレイガイド、写真・印刷部門も書籍の隣に移転、その分購買部の活用が充実した。一九七〇年には農学部食堂も拡充された。医科研（医科学研究所）でも閉鎖されていた食堂が一九七一年に生協食堂として開設された。

これらには長年の組合員の願いと運動があつたことが付記されなければならない。象徴的には、一九六八年一一月に東大生協が発表した『東京大学の厚生白書』であろう。発行にあたつての前文では「現在、東大民主化闘争のなかで、大学内のさまざまな非民主的な体制、補導的、学生運動対策的な大学当局の姿勢が明らかになっていますが、厚生問題についてもその例外ではありません」として、本郷、駒場の生協センター

構想、学内食堂の構想、各支所（東大附属研究所の生協施設の呼称）の厚生施設構想を展開した。

それでもまだ、学生食堂の拡充が喫緊の課題であると大学当局も認識していた。東大闘争での学生の怒りの源流に劣悪な勉学研究生活環境があつたという認識である。本郷地区では食堂施設の拡充がなかなか進んでいなかつた。そのような大学交渉に東大生協を代表して生協理事長に就任した福武直教授が臨んでいた。その存在は東大のみならず、その後全国の大学生協の路線を大きく、かつやんわりと変えたという計り知れない大きさがあつた。その点は後述する。

なお、福武理事長の時に大学の総長側で責任者となつていていたのは大内力教授であったようで、福武—大内ラインで「生協側の要求をだいたいにおいて満たすことになつたのです。おかげで大学と生協の協力関係はずつと強化され」たと、暴露氣味に書かれている（『埋火——大内力回顧録』二〇〇四年、御茶の水書房）。

ちなみに、この回顧録には「V 東大紛争の渦中で」の章で、「一項目六二ページのインタビューが掲載されている。「もつとも熱がこもつた話は東大紛争だ」（編者あとがき）と言うだけあって、様々なことが書かれている。歴史観としては如何なものかと感じるところはあるが、大学の事務方、文部省（当時）とは異なるいわば大学総長室側の視点が見えて興味深い。

こうして現在もある「東大中央食堂」も、オイルショックの影響を受け、当初より二年遅れて一九七五年にオープンした。これに先立ち、中央食堂の南側に新店舗が建設されていた。今の生協第二購買部である。これらの施設拡充の波は一九八〇年代まで続いた。

その中で、現在の本郷書籍店舗が第二食堂建物に拡充して移転したのは八〇年代初期であつた。もはや安田講堂地下の七五坪では狭隘となつていたので拡大を目指していたが、同じ場所では無理、また大学も「安田講堂再開発」をしたいという両者の思惑が相まつて、赤門地区から離れるものの、一五〇坪店舗、バツク

スペースを含めると計二〇二坪に惹かれて移転を決めた。  
さて私と言えば。

東大闘争も一段落し、人より長く在籍し、この間、政党の選挙専従アルバイト（青森県議補選や東京・立川市長選ほか。選挙政策单発ビラなども作つても構わない大らかな時代であった）で稼いだり、都学連（東京都学生自治会連合）で北部地区の学生自治会担当でいわゆる「オルグ」で駆け回つたりしながら、実験・実習のある工学部を卒業して東大生協に就職した。学生時代は生協の総代になつたこともなかつたが、東大生協や全国大学生協連の専務理事、最後は副会長理事に就任した。

生協に入るきっかけは、前述した世界平和友好祭に同じく参加した大学生協連の職員、後の東大生協専務理事の方を知つていたことによる。所属した研究室からは就職先として有名化企業の研究所なども紹介されていたが、生協に就職することにした。一九七三年春のことである。

それから東大生協労働組合の委員長や専務理事などを経験して、一九八五年に全国大学生協連の専務理事に就任した。その時福武直会長理事は、就任して一〇年ほど経つて、大学生協で、マイルストーンとなる出来事の一つは、一九七八年一二月、全国の大学生協専務理事等に向けの講演「大学生協の現状と課題」（通称「福武所感」）である。要約すれば以下のようなことが言われた。

大学は教員や職員そして学生と、役割や立場の異なる人たちで構成されているが、大学生協は生活の場でそれぞれが対等な立場で参加し、役割を果たすところである。また、大学生協は大学にとつて「厄介な存在から頼りになる存在に」ならなければならない。経営は「赤字は良くない」との意識に改革すべきである。施設獲得闘争から大学との協調による生協施設充実へ。「学生生協」から教職員も参加する文字通り大学生協になる必要がある、等々。

この当時、東大生協の常務理事で駒場購買部店長を兼任していた筆者としては、このレジュメをすぐにコピーして職員に配つたくらいだから感動したということである。もちろんここでは「大学の自治」のあり方を語つたわけではない。しかし、生活の場と限定はしているが「大学コミュニティ」のあり方（対等な立場で参加）に言及し、少なくともそれは大学生協運営の場で現実化していると語つた。この所感の背景には、東大闘争の前後の東大生協の変化を実感した福武直さんだからこそ言えたのではないか。私自身も学生運動から「卒業」していたので、より実感したのだとその時代を顧みている。

大内力さんは、福武直さんから「いわば他動的に生協の世界にひっぱりこまれる事になった」としながらも、「協同組合思想とそれにもとづく協同労働を基幹とした新しい生産関係の構築を考えてみようとする発想をもつ契機を与えること」になつたのは拾いものでした」と回顧している（前述『埋火』）。

\* この「協同労働」は「協同組合一般での労働」を意味するものではなく、労働者協同組合法として日本で間もなく法制化されようとしている新しい形の協同組合での働き方を指している。大内力さんは二〇〇四年当時「協同労働の協同組合」法制定市民会議の会長である。

東大闘争も終結して二十余年。大内力さんは大学生協連会長理事時代の一九九〇年代初期、当時の島田副会長理事とともに、東京都知事選候補の畠田重夫さんを推薦したことが鮮明に焼き付いている。数年後、推薦した理由を聞くと、「世の中が右傾化したので、相対的に左傾化したのだ」と酒の場で笑つて答えていた。

#### 4 付隨する重要事項

本論のテーマである「大学自治と大学コミュニティ」については以上であるが、二、三どうしてもお話ししたいことがある。

第一に、東大生協労働者の立場と運動である。

東大闘争には、生協労働者（生協職員）も参加した。生協労働組合の一九六九年九月の定期大会総括（副委員長報告）によれば、「病院封鎖」「全学封鎖」が全共闘によつて叫ばれたため対決が必然的になつたと記されている。多くの生協職員の率直な怒りは、全共闘グループの一部からとはいへ、職場（店舗や食堂）を荒らされ、商品・物品を持ち去られたことが契機となる。社会運動としては決して許されるものではない。生協職員にとつて、東大闘争は自らの職場と生活を守る運動としても認識され、大学民主化とともに暴力排除も主体的な課題になつていつた。

生協職員が大学固有の構成員かと言われば、議論は別れるかもしれない。大学構成員として大学の運営に関与しうる（全構成員自治論）かの論点では、別の法人（生協）の構成員だからである。しかし、生活の場と見た大学コミュニティ充実の実践的な担い手であることは明瞭である。そもそも、学生・教職員の生活を守るという生協の使命は、生協職員の働きがいでもあったのである。

第二に、東京教育大学（教育大）の筑波移転反対闘争との関連である。

冒頭に挙げた二つの事件のうち、六九年の「入試中止」は東京大学固有の問題ではなく、教育大も「入試中止」になつた（体育学部を除く）。当時の『朝日新聞』には「①一部学生の暴力によつて両大学の入試が中止されたことは遺憾だ、②政府も今日の事態について深く自覚し、教育の再建に全力をつくす」との保利官房長官の談話が掲載されている（一九六八年一二月三一日付）。

教育大ではこれを機に学長、学部長、評議員ら首脳総退陣となり、翌年から学生募集は復活したものの、教育大そのものは廃校方針となり一九七三年に学生募集停止、筑波大学へと引き継がれて、大学は一九七八年三月に閉校となつた。閉校を前にして、学生数の減少も必然であつて、教育大生協も解散を決断せざるを

得なかつたが、店舗を閉鎖しても教育大生協の組合員は東大生協を利用する措置を探つた。当時私は生協本郷書籍部の職員（店長）であつたが、理事会の決断には心から賛意を表した。

ところで、当時活動していた教育大学生には、東大闘争について複雑な思いを持つ方々が多いと思う。「筑波移転反対闘争の重要な時期に、どうして東大に応援に行かねばならないのか」という思いがあつたのは事実である。「東大のおかげで我が大学（の運動）も犠牲になつた」との声は、単純な濡れ衣でもない。私自身も、都学連、東大生協、大学生協連時代から今でも複雑な思いを持つている。

第三に、敢えて否定的に述べるが、これを機に進んだ自治活動の衰退についてである。衰退したことについては論争にはならないと思われる。大学の自治を語る学生・教職員の主体が意思をはつきりさせないこともあるが、もっとも象徴的な学生自治会活動も衰退をたどつた。

さまざまな要因があると思われるが、まずは暴力事件の喧伝であろう。ゲバと殺人に象徴される暴力的行動は「内ゲバ」として「学生運動・左翼運動の象徴」かのようにマスコミで記事が踊つた。あさま山荘事件しかしり。東大駒場においても七〇年代前半に、鉄棒で頭を破られ脳漿が飛び出て死亡したことがあつた。寄り付かなくなるのは当然であろう。共産党内部では「新日和見主義」を一掃するとした事件は、六〇年代を支えた活動家、東大闘争を進めた活動家の中での運動や理論と一線を画す契機にもなつた。

敷衍すれば、革新政党とのかかわりで「贊意・反感」の関係性が大きかつた東大闘争までの学生運動・左翼運動の状況から、その関係性が「無関心」へと変わっていったのが七〇年代の緩やかな変化であると実感している。別な側面では知識人が革新政党に関心がなくなつていったのである。極めて残念な時代でもあつた。私見としては、運動側に〈闘うこととは学ぶこと〉という学習意欲が急速に薄れ、文化活動、理論闘争などのイデオロギー闘争が死語になつていったのが印象として拭いきれない。これらの事実は解明しなければ

ならないと思つて  
いる。